

『フフ・トグ(青旗)』ほか近代史資料の 調査・整理の現状と公開にむけて

堤 一昭

1. 石濱¹文庫の近代アジア史資料

今回のワークショップでとりあげる、満洲国で1940年代前半に発行されたモンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』は、東洋学者・石濱純太郎(1888(明治21)年～1968(昭和43)年)のコレクション「石濱文庫」にはほぼ全号が収められている。石濱文庫には、『フフ・トグ(青旗)』以外にも近代史、日本以外のアジア史資料(彼にとっては“同時代史”と呼ぶべきか)も多く所蔵されている。本報告では、それらの調査・整理の現状と、公開へのとりくみについて考えたい。

1) 石濱純太郎の、近代アジア史資料に関わる資料収集について

内藤湖南(1866(慶応2)年～1934(昭和9)年)らを日本の東洋学者の第一世代とすれば、石濱純太郎は第二世代にあたる。大阪の漢学塾の泊園書院、東京帝大の支那文学科に学ぶ²など“漢学”から学問をスタートした石濱が、そこから関心を拡げて『フフ・トグ(青旗)』をはじめとするモンゴル語資料、近代アジア史に関わる資料をなぜ、どのようにして収集するに至ったかの詳細は、まだよく分からない。ただ経歴や彼についての記述の中で注目されるのは、次の二点である。

第一は、創立当初の大阪外国語学校の蒙古語科に選科委託生として入学して(1922(大正11)年)、モンゴル語を学んだこと。そこでロシア語教員のニコライ・ネフスキーと知り合い、また来講していた京都帝大の羽田亨(「言語学概説」を担当)に学んだことである。

¹ 以下、原資料に「石浜」「石濱」とある場合も含めて、「石濱」の表記に統一する。

² ちなみに、石濱の東京帝大在学中に起こった南北朝正閏問題は、義兄の代議士・藤澤元造(黄鵠)が関係していた。石濱が学び、終世関わり続けた泊園書院は、幕末に藤澤東暎が興して以来、藤澤家の三代四人が主催した。石濱の姉かつは元造の弟、章次郎(黄坡)の妻である。

これに先立つ内藤湖南との出会い（1916(大正 5)年ころ）と合わせて、これらの経験、人間関係が、『元朝秘史』をはじめとするモンゴル語文献、西夏文字／語の研究、ウイグル語文献、敦煌学の研究へと、石濱を導いたものと考えられる。

第二は、石濱が同時代のモンゴル語資料を早い内から収集していたことが、新聞記事から判明することである。「学界新風景(19)」なる連載記事に“東洋学の三人男”として紹介された石濱について、「わが国で蒙古語の新聞を蒙古から全部取寄せて読んでいるのは、陸軍の参謀本部の外に、ひとり石濱氏を数えるのみであるという。」とある（下線部は筆者による。『東京日日新聞』1927（昭和 2）年 6 月 22 日。堤一昭 2012, p.19）。ただ、この「蒙古語の新聞」が具体的に何なのか、また「蒙古」がモンゴル人民共和国を指すのかどうか、この記事からだけでは判然としない。

くわえて、石濱の収集の特徴を指摘した次の文章も興味深い。「いわゆるゲテもの(／俗書)といって、当時の帝大(／京大)などでは購入をはばかる種類の書物には、とくに目をかけて集めている。これは今日になっては非常に貴いことで、石濱文庫の特徴の一つはこの点にある。」（下線部は筆者による。外山軍治 1975；同 1979）『フフ・トグ(青旗)』や本稿の後半でふれる資料類も考え合わせれば、「ゲテもの(／俗書)」の中には、書物以外にも新聞、雑誌、パンフレットなど零細な近代史資料を含めてもいいのではなかろうか。

2) 石濱文庫の近代アジア史資料の特徴

そもそも「石濱文庫」全体の特徴、また特に近代アジア史資料についての特徴は何だろうか。それは、石濱純太郎の収集資料の全てを受け入れていること、そしてこれまでに注目された近代アジア史資料が「未整理」分からのものであることである。

石濱純太郎が亡くなった 1968(昭和 43)年に、大阪市住吉区内の石濱邸から「すべて」の資料を受け入れ、大阪外国語大学(上八学舎)に搬入したという（種別毎に分散受け入れ、一部は売却となった徳永康元旧蔵書(金子亨 2007)などと異なる。石濱の日記、友人の画家・小出檜重からの書簡などは、石濱家に残された）。それから十年にわたる教員、図書館員ら関係者の努力の末、1979 年に索引付きの目録『大阪外国語大学所蔵石濱文庫目録』が刊行された（索引無し版は 1977 年に刊行）。

この目録では、文庫の内訳・冊数として「漢籍 20,262 冊、和書 9,021 冊、洋書 3,269 冊、雑誌 9,743 冊」と記載される。なおこれらの内訳以外に、目録には「写真の部」が設けられ、稀少資料の図版とその一部の目録が載せられている（1977 年版、1979 年版で収録図版が異なる）。しかし、写真の種別・キャプションは整わず、この「写真の部」の図版・目録はともに未定稿といわざるを得ない。

この『石濱文庫目録』に未収録、未整理の資料が少なくとも 1 万点を超える量で残され

ているのが実状である。つまり、和洋書の NDC 分類、漢籍の四部分類になじまなかった書簡や原稿、研究ノート・メモ、写真資料、絵はがき(内藤湖南に随行して訪欧時のもの)、石刻拓本などの研究資料、販売用目録、石濱家家政資料が未整理のままである。また、目録未収載の図書、雑誌ほか定期刊行物や抜刷も相当の分量がある。

近代アジア史資料のうち、漢語の図書・定期刊行物の所在については、『石濱文庫目録』の漢籍の部・F 新学部 (pp.171-197, 約 800 タイトル, NDC 分類) に載せられていて、近代モンゴル関係の漢語資料に特色を見出すことができる。ただし、この部分の資料は阪大図書館 OPAC や cinii books からの検索ができない(可能なのは、洋書と四部分類の漢籍)。またこの目録所蔵の大学図書館は 57 館 (1977 年版の所蔵は 15 館) のみのため、この資料群の存在は専門研究者にもあまり知られていないようである。

石濱文庫の目録未収載・未整理の資料は、学術史の資料としての性格も強いと思われるが、石濱と同時代の近代アジア史資料がなお多く含まれていると考えられる。というのは、『フフ・トグ(青旗)』をはじめ、これまで稀覯の近代アジア史資料として着目されてきたものは、文庫目録に未載・未整理の資料がほとんどだからである。以下の①～③が例としてあげられよう。

①『フフ・トグ(青旗)』をはじめとする 20 世紀前半のモンゴル語新聞：

目録では上述の「写真の部」に一部のサンプル画像が載るのみである。石濱文庫所蔵の満洲国のモンゴル語定期刊行物の概要については、すでに研究がある(広川佐保 2007 ; 内田孝 2015)。

②ニコライ・ネフスキー関係書簡：

石濱とともに西夏文字研究を行ったネフスキーは、ソ連帰国時に一部の書簡を石濱に託し、その後も書簡のやり取りがあった。ソ連東洋学と石濱の学術交流史についても研究がある(加藤九祚 2011; 生田美智子 2003)。現在、文庫内に所在が判明している書簡については目録を作製した(堤 2013)。

③20 世紀前半のシベリア、東北アジアに関する刊行物：

『バルガ』(Барга, А. Баранов, Харбинь, 1912, 59 p.), 『自由シベリア』誌(プラハ刊), シベリアのユダヤ人自治州で刊行されたイディッシュ語新聞『ピロビジャンの星』紙(1937 年。現在、所在未確認)などの価値が指摘されている(田中克彦 2002, 2009, 2010, 2013)

これら以外にも、報告者が現在進めている未整理資料の調査で、以下の近代アジア史資料が見出されている。零細なもので、他所にも所蔵されていると思われるが、まずは何がどれだけあるか把握すべきだろう。

◎フィリピンのタガログ語雑誌『Liwayway』:

日本占領期の1943(昭和17)年5月21日号(表紙に“大日本比島派遣軍発行認可”の文字が見える)。日本占領期のフィリピンでの言語政策を知る資料である(この資料の存在は、田中仁先生の示教による)。

◎太平洋戦争末期のアメリカ軍の宣伝用ビラ『マリヤナ時報』1945(昭和20)年6月1日号:

米軍の沖縄の首里城制圧、横浜空襲などの記事が載る。当時の日本では、所持することが危険であった資料だろう。

【追補】ワークショップ後の調査で、新たに目録未収録の、以下の近代刊行のモンゴル語文献も見出された。早くから知られたモンゴル文経典などの古典籍、カルムイク語訳聖書などとあわせて、専門研究者による徹底的な調査・目録作成が必要である。

◎ *Mongyol-un yeke toli bičig* / 『蒙古大辞典』: 籌蒙学社, 1912年。「F829」のラベルが貼られている。(『中国蒙古文古籍総目』: 06691)

◎ *Činggis qayan-u čadig* / 『諸汗源流黄金史綱』: 蒙文書社, 1925年。(『中国蒙古文古籍総目』: 08907)

◎ *Angq-a suryaqu jiruqai-yin bičig* / 『蒙古(／蒙文)初等算術』: 東京・大日本図書, 1907(明治40)年, 奥付に「喀喇沁王府」とある。

◎ *Galbingga-yin egesig kemekü neretü darumal* / 『カラピン・ガイヤン』: 日暮臺雄編輯・興安北省公署民生科発行, 1943(満洲国・康徳10)年。チベット文・モンゴル文の併記。日本軍によるシンガポール陥落の記事, 写真を掲載。(『中国蒙古文古籍総目』: 06144)

2. 石濱文庫の調査・整理の現状

石濱文庫は、昨年度2014年9月～11月に、大阪大学箕面キャンパスの外国学図書館(旧大阪外国語大学附属図書館)書庫3階の貴重図書室から、豊中キャンパスの総合図書館C棟3階に新設された貴重コレクション室に移転した。従来から懸念されてきた温度・湿度の問題が解決し、管理がゆきとどいた設備に収められたことは大変喜ばしい。移転後には、『フフ・トグ』紙のデータベース化の共同研究が、昨年2014年12月の研究セミナー「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』のデジタル化と公開の可能性」,そして本日のワークショップ「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』データベースの構築・公開に向けて」開催で大きく進展することも、石濱文庫受け入れ後の調査・研究の中で、特筆すべきことである。

しかしながら基本的なこととして、排架の問題, 整理記録の問題が未解決であることも

留意しなければならない。目録に記載されている図書や定期刊行物類が、必ずしも請求番号どおりに排架されていない。つまり、資料の所在が全ては確認できていない。また、帙が未作製の和綴じ本（主に和古書）が多数あり、それらは別にまとめて置かれている。和漢洋の図書ほか、補修が急務の資料も多数にのぼると考えられる。なお、未整理資料も配置・保管状況が把握されていない。残念なのは、移転前からの図書館職員によるこれまでの整理作業の概要が不明（いつ、だれが何をどこまで行ったかが、統一的に記録・継承されていない可能性もある）。

移転前からの上記の認識のもとで、貴重図書室資料の詳細な所在／排架図を作成していた（2011年9月、12月；2012年1月調査）。これにより未整理分も含め、おおよそどの資料がどこにあるのかが把握しえた。移転後の現在は、貴重コレクション室への移動分について新たな所在／排架図の作成を作成中である。なお、史料的高価値の高い石刻拓本類の調査・整理も続行している。

3. 資料のより広い公開と活用にむけて

——付：外国学図書館「旧分類」図書の近代アジア史資料とともに

石濱文庫の近代アジア史資料の、より広い公開と活用を考える際には、石濱文庫のみで考えるのではなく、外国学図書館「旧分類」の資料をあわせて構想すべきである。

外国学図書館「旧分類」図書とは、大阪外国語学校(1922(大正11)年創立)、および附設の第五臨時教員養成所(1923(大正12)年～1931(昭和6)年。国語漢文科あり)の旧蔵書のことを指す。大阪大空襲で校舎は全焼したものの、書庫は被災を免れた(蔵書数は1942年の時点で47,000冊、または約6万冊ともいう)。戦中戦後の混乱や高槻学舎への移転、上八学舎への復帰の中で一部の散佚があったが、現在も大阪大学箕面キャンパスの外国学図書館の書庫に排架(基本的に和装本(和漢混在)は1階の、洋装本は3階の集密書架)。

ところで、近年の研究動向に、「ある機関...が、どのような意図をもって資料を収集したのか」という問題は、研究者がライブラリアンとともに意識すべき問題の一つである」として、戦前期の資料の全体をとらえようとする試みがある(阿部安成 2003。彦根高等商業学校(滋賀大学経済学部の前身)、横浜高等商業学校(横浜国立大学経済学部・経営学部の前身)の例が論じられている)。同様に大阪外国語学校での資料収集の意図・方針はどうだったのかを、(石濱文庫についても合わせて)あらためて考える価値・必要があるだろう。

では、より広い公開・活用が望まれる、石濱文庫および「旧分類」の資料群にはどのようなものがあると考えているのか。先に挙げたものとも一部重複し、前近代の資料も含め

てだが、現時点であげうるのは以下のような資料である。

・近代モンゴルの定期刊行物：

石濱文庫の『フフ・トグ』ほか満洲国で刊行のものに加えて、「旧分類」の『蒙文白話報』ほかの中華民国期(1910～30年代)のモンゴル語定期刊行物8種(内田孝 2015, 41-43, 55)などは、一群の資料として全貌を把握すべきである。すでに『フフ・トグ』をはじめ相当部分がマイクロフィルム撮影済みで、そこからデジタル化も行われている。稀観のもの、資料劣化が懸念されるものから優先的に公開を行うべきだろう。

・満洲語資料：

稀観本の『百二十老人語録』ほか、『庫倫事宜』、『四體奏事檔』(満洲語・チベット語。清・道光年間)など、「旧分類」には、相当多数の満洲語資料が分散して収蔵されている。石濱文庫のものと合わせて、専門研究者による再調査と目録作成が望まれる。

・近代中国イスラーム文献と近代ベトナム漢文史料：

「旧分類」には、19世紀末から20世紀初頭、主に北京で出版された中国イスラーム文献、および同時期の近代ベトナム漢文史料が収められている。大阪外国語学校の創設時に収集されたものと考えられる。東洋文庫での収蔵などと照らし合わせつつ史料価値を探り、専門研究者に利用の便を図るべきである。これらについては、予備調査を行い、仮のリストを作成済みである(本稿末尾の「大阪大学外国学図書館「旧分類」の中国イスラーム関係図書」,「大阪大学外国学図書館「旧分類」のベトナム漢籍」を参照)。

・東洋学学術史資料：

たとえば、内藤湖南の手校本『蒙古源流』漢文版³(鴛淵一を通じて、「旧分類」に入ったものと推測される)。モンゴル史そのものの史料としてではなく、近代日本の東洋学の学術史資料として注目すべきである。

ニコライ・ネフスキー関連の書簡類は、上述のように目録は作成済みだが、重要なものは撮影・画像公開が望まれる。またユリアン・シチュツキー(Ю. К. Щуцкий, 楚紫気)の漢文書簡など未解読資料の研究も必要である。

・シベリア研究資料：

a. 石濱文庫の18世紀以降のロシア語ほかの文献コレクションは、日本国内の所蔵として有数のものと予想される。『シベリアに憑かれた人々』の末尾(加藤九祚 1974, p.232)には、シベリア関係文献の日本でのコレクションの紹介が載るが、石濱文庫目録刊行前のため、石濱文庫への言及はない。今後、原山煌によるシベリア研究文献紹介(原山煌 1984)

³ 内藤虎次郎「奉天宮殿にて見たる図書」『内藤湖南全集第12巻』筑摩書房、1970年の註2(41頁)に「(『蒙古源流』の)漢訳本は官版と文溯閣四庫写本とは異同があるので、所蔵の流布本に朱藍両筆を以て官版と文溯閣本との対校をした。」とあるものに相当する。

を利用して、資料のまとまりを確認する必要がある。

b. 田中克彦が紹介した石濱文庫の『ピロビジャンの星』(所在調査中。田中克彦 2002, 同 2010) など, 外国語新聞類はまとめて排架して, 適切な保管・保存措置を行うことが望まれる。

・石刻拓本 :

羽田亨を団長とする遺跡調査“羽田ミッション”(1935年)で内モンゴルにおいて採拓したモンゴル文・漢文合璧碑の拓本(14世紀)ほかは, 資料価値も高い。おおよそ1300枚ある石濱文庫所蔵拓本のなかで, 優先して適切な補修措置を行う必要がある。

・その他 :

上述の『Liwayway』, 『マリヤナ時報』など, 多岐にわたる種類の新発見資料を順次追加していくリストを作成し, おおのこの資料価値について専門研究者からの情報を得るべきである。

* * *

近代アジア史資料の公開・活用についての構想

現時点で構想しているのは以下のような方法である。

「(仮称) 大阪大学図書館所蔵アジア学コレクション」のサイトを, 大阪大学図書館ホームページ HP の中に設けて, 3段階の公開レベルを設ける。①タイトルと説明のみ(閲覧可能), ②タイトル・説明+画像(サンプル画像または, e-book などによる全文画像), ③タイトル・説明・索引と参照付き画像データベース [『フフ・トグ』データベースは③をめざす]。(なお, ①~③での資料説明は, 先行研究を参照して編集する。)

上記の構想を実現していくには, 解決すべき多くの課題があるだろう。まずは, 資料公開で先行する国立国会図書館の近代デジタル図書館, 東洋文庫, 京都大学(人文科学研究所, 地域研究統合情報センターなど)との差異化をはかる。つまり, これらの機関の公開する資料とは重複しないこと, そして大阪大学所蔵資料の特色が認識されるように留意すべきだろう。また, 協力・助言を仰ぐためにも, これらの機関ほか, 関係する専門研究者やライブラリアンとの継続的な交流・協力が望まれる。また, 資料を公開した際に, サイトの管理者をどうするか, 研究や維持の費用をどう継続的に得るかも構想段階から十分考える必要がある。

参考文献

阿部安成 2003 : 「彦根高等商業学校収集資料の可能性について」(近現代東北アジア地域史研究会) News letter, 第15号, 2-13頁。

生田美智子 2003 : 『資料が語るネフスキー』大阪外国語大学。

- 内田孝 2015 : 「モンゴル語近現代文学研究からみた『青旗(フフ・トグ)』紙 : モンゴル語定期刊行物の研究現況に言及しつつ」堤・田中編『戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』のデジタル化と公開の可能性』, 37-64 頁。
- 大阪外国語大学附属図書館 1979 : 『大阪外国語大学所蔵石濱文庫目録』, 大阪・大阪外国語大学附属図書館 (索引なし, 「写真の部」の異なる 1977 年版あり)。
- 加藤九祚 1974 : 『シベリアに憑かれた人々』岩波書店, 232 頁, 「シベリア関係のコレクションについて」。
- 加藤九祚 2011 : 『完本 天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯』平凡社。
- 金子亨 2007 : 「徳永先生の蔵書のこと」『古書通信』937 号, pp.8-10 (転載版がネット上で閲覧可能)
- 田中克彦 2002 : 「石濱文庫の『ピロビジャンの星』『法廷にたつ言語』, 岩波書店, 286-290 頁。
- 田中克彦 2009 : 『ノモンハン戦争 モンゴルと満洲国』, 岩波書店。
- 田中克彦 2010 : (講演概要) 「石濱文庫が語る世界」『大阪大学図書館報』, 第 43 巻第 3 号, 2010 年 3 月 1 日, 3-4 頁 (ネット上で公開)。
- 田中克彦 2013 : 『「シベリアに独立を!」諸民族の祖国をとりもどす』, 岩波書店。
- 堤一昭 2012 : 「石濱純太郎を紹介する新聞記事 2 件(1923 年,1927 年)および解説」, 堤編『石濱文庫の学際的研究 : 大阪の漢学から世界の東洋学へ』平成 23 年度大阪大学文学研究科共同研究 研究成果報告書, 16-21 頁。
- 外山軍治 1975 : 「石濱文庫について」『(大阪外国語大学附属図書館) 館報』第 2 号 (『石濱文庫目録』1979 年に部分修正のうえ再録)。
- 原山煌 1984 : 「シベリア」島田ほか編『アジア歴史研究入門 4』同朋舎, 251-281 頁。
- 広川佐保 2007 : 「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」『環日本海研究年報』, 第 14 号, 104-126 頁。

【追補】

《中国蒙古文古籍总目》编委会编, *Dumdadu ulus-un erten-ü mongyol nom bičig-ün yerüنگkei yarčay* / 《中国蒙古文古籍总目》, 北京图书馆出版社, 1999 年。

◆ 大阪大学外国学図書館「旧分類」の中国イスラーム関係図書

◎2009 年 11 月 4 日調査分。所在は, 書庫 1 階集密書架 C1 (1), C5 (2~37)。書誌情報は完全に記録し得ていない。

1. 『天方詩經』3 冊, 光緒 16 年 (1892), 提督軍門馬如龍雲峯氏刊。[旧分類 : 380C/121, 大正 12 年 (1923) 6 月 20 日]
2. 『歸真要道譯義』卷首・4 卷, 4 冊 (排印本), 光緒 17 年 (1893) 序, 元代回賢 二ト頓撈吸額補白克爾著, 念一齊藏版。[旧分類 : /130/82] ☆?
3. 『扯哈雷凡速』1 冊, 民國 10 年 (1921) 3 月, 北京牛街, 清真書報社。[旧分類 : /130/66]

4. 『指迷考証』1冊，民國11（1922）年，北京，清真書報社。[旧分類：/130/68]
5. 『清真釋疑補輯』1冊，光緒辛巳（7年，1881）。[旧分類：/130/69] ☆
6. 『雜醮公文要集』1冊。[旧分類：/130/70]
7. 『修真蒙引』1冊。[旧分類：/130/71] ☆
8. 『回回原來』1冊。[旧分類：/130/72] ☆
9. 『回耶辨真』1冊，清真書報社。[旧分類：/130/73]
10. 『四篇要道』1冊，清真書報社，民國12年（1923）。[旧分類：/130/74]
11. 『歸真總義』1冊，清真書報社，光緒34年（1908）→民國11年（1922），20版。[旧分類：/130/75]
12. 『祝天大讚真經』1冊。[旧分類：/130/76]
13. 『回教辨真』1冊。[旧分類：/130/77]
14. 『漢譯耳木代』1冊。[旧分類：/130/78]
15. 『正教真詮』5冊。[旧分類：/130/79] ☆
16. 『清真要議』1冊。[旧分類：/130/80]
17. 『禮法啓愛』1冊。[旧分類：/130/81]
18. 『清真教典歌』1冊。[旧分類：/130/83]
19. 『清真學理譯著』1冊。[旧分類：/130/84]
20. 『清真教五功齋戒』1冊。[旧分類：/130/85]
21. 『清真教飲食篇』1冊。[旧分類：/130/86]
22. 『清真教天國地禁說』1冊。[旧分類：/130/87]
23. 『五功釋義』1冊。[旧分類：/130/88]
24. 『宗教正基』1冊。[旧分類：/130/89]
25. 『教欵捷要』1冊。[旧分類：/130/90]
26. 『四教要括』1冊。[旧分類：/130/91]
27. 『天方三字教註解』1冊。[旧分類：/130/92]
28. 『清真教考』1冊。[旧分類：/130/93]
29. 『真功發微』2冊。[旧分類：/130/94] ☆
30. 『清真大學』1冊。[旧分類：/130/95] ☆
31. 『漢譯禮拜箴規』1冊。[旧分類：/130/98]
32. 『清真釋疑』1冊。[旧分類：/130/97] ☆
33. 『至聖寶訓』1冊。[旧分類：/130/96]
34. 『聚禮明源』1冊。[旧分類：/130/161]
35. 『赫廳』1冊。[旧分類：/130/162]
36. 『教欵捷要』1冊。[旧分類：/130/163]
37. 『新譯天方大化歷史』2冊，中華民國8年（1919），北京牛街，萬全書局印。[旧分類：210/194]

☆印を付したものは、《回族和中国伊斯兰教古籍资料汇编》，宁夏少数民族古籍整理出版规划小组办公室编；张秀峰，马塞北选辑整理，天津古籍出版社，[1987.7 前言]に収められている。この資料汇编所収の15種のうち、8種（うち1種は疑問あり）が上記の旧分類図書に存する。

◎2001年7月31日調査分

38. 『天方字母解義』1冊，金陵劉介廉先生甫書，光緒20年（1896）重鐫，成都敬畏堂周氏蔵版。[旧分類：320/140]

39. 『天方奇異勸善録』1冊，北京牛街，萬善書局。[旧分類：940/47]

◆ 大阪大学外国学図書館「旧分類」のベトナム漢籍

◎2001年7月31日調査分

1. 『壽梅家禮』1冊，維新丙辰（10年，1916）仲春吉日重刊，觀文堂蔵版。[旧分類：550/37]

2. 『新訂萬事不求人書』1冊，成泰甲午（6年，1894年）蒲月下澣新刊，盛美堂蔵版。[旧分類：550/38]

3. 『日用常談』1冊，孫□□，署祭酒范先生□，啓定壬戌（7年，1922）荷月，聚文堂蔵版。[旧分類：550/48]（□の部分は，字喃=チュノム）

4. 『國朝律例撮要』三卷，1帙3冊，維新己酉（3年，1909）仲秋新刊。[旧分類：710/4]